

中学生のスクールカーストと学校適応の関連

水野君平* 太田正義**

本研究の目的は、スクールカーストと学校適応の関連メカニズムについて、社会的支配志向性 (SDO) に着目し、検討することであった。具体的には、自己報告によって生徒が所属する友だちグループ間の地位と、グループ内における生徒自身の地位を測定し、前者の「友だちグループ間の地位格差」を「スクールカースト」と定義した。そして、SDO によるグループ間の地位から学校適応感への間接効果を検討した。中学生 1,179 名を対象に質問紙調査をおこなった結果、グループ内の地位の効果が統制されても、グループ間の地位は SDO のうちの集団支配志向性を媒介し学校適応感に対して正の間接効果を持った。つまり、中学生において、SDO を介した「スクールカースト」と学校適応の関連メカニズムが示された。考察では、集団間の地位格差を支持する価値観を通して、高地位グループに所属する生徒ほど学校適応が向上する可能性が議論された。

キーワード：仲間関係、仲間内の地位、学校適応、社会的支配志向性、スクールカースト

問 題

中学生にとっての友だちグループの重要性

中学生の学校生活において、仲間関係は重要であり (山中, 2009)、特に友人関係は勉強などの他の要因と比べ、学校適応感と強く関連することが多くの研究で指摘されている (e.g., 古市・玉木, 1994; 大久保, 2005)。また重要な他者という視点からも、アタッチメントの対象が 8 歳から 14 歳までに親から友人へと徐々に移行する (Hazan & Zeifman, 1994) ことが知られており、中学生の適応にとって友人関係は重要な要因であるとされている。

友人関係においては、中学生からはチャムグループやチャムシップと呼ばれるような同じ興味関心で結ばれる同性・年代の「友だちグループ」を形成する (e.g., 石田, 2002; 楠見, 1986)。友だちグループは、班活動などの組織化された集団ではなく、「同じ学級の児童・生徒で構成された、休み時間などの時間帯になると、いつも一緒に過ごす児童・生徒の集まり」(山中, 2009) という「インフォーマル・グループ」の一種である。本研究でも、山中 (2009) の定義を採用し、インフォーマル・グループである友だちグループのことをグループと呼ぶ。そして、グループの関係も学校生活では重要になる。例えば、グループからの拒絶に対す

る不安は生徒の学級満足感を低下させるということが指摘されている (石田, 2002; 石田・小島, 2009)。

スクールカーストの問題

さらに近年ではグループ「内」の関係性が学校適応に影響するだけではなく、グループ「間」の関係性もいじめ (堀, 2015; 森口, 2007) や学校適応 (鈴木, 2012) に影響することが教師、教育関係者、教育社会学者から指摘されている。そのようなグループ間の関係の問題はスクールカーストと呼ばれている (e.g., 鈴木, 2012)。スクールカーストとは、クラス内のステイタス (森口, 2007) とも呼ばれ、インドのカースト制度のように、グループ間の関係性に「地位」の変動性が低い階層関係が生まれる現象であり、生徒の学級での生活や学校適応に影響を与える。本研究では、「スクールカースト」¹を学級内におけるグループ間の地位格差として定義する。スクールカーストの地位について、例えば、「高地位グループ」の生徒は活発で、気が強く、異性からの評価が高く、「低地位グループ」の生徒は地味で大人しいことが挙げられている (鈴木, 2012)。そして、高地位グループに属する生徒は学級内でリーダー的役割を担い、行事や学級活動で活躍する。その一方で、低地位グループの生徒に対して、攻撃的な振る舞いや見下すなどの卑下行動を取ると大学生への回想インタビューから指摘されている (鈴木, 2012)。また、低地位グループの生徒には高地位グループが教室内で支配的

* 北海道大学大学院教育学院
〒060-0811 北海道札幌市北区北 7 丁目
kimihira0120@gmail.com

** 常葉大学教育学部

¹ 「スクールカースト」と述べる場合、本研究で定義したグループ間の地位格差を指すものとし、グループ間の地位は生徒の自己報告によって測定されたものである。

に振る舞うために、被抑圧的な学校生活を余儀なくされるという問題も存在する。さらに、鈴木 (2012) では、神奈川県の中2年生に対する調査で、「クラスで人気者である」生徒ほど学校が楽しく、学級の友人関係にも満足していると感じていることを明らかにしている。

そして、スクールカーストの地位を決定する要因に関しては、自己主張能力・同調力²などのコミュニケーション能力の組み合わせによって決まると指摘されている (堀, 2015; 森口, 2007)。中学生に対する調査からも、自己主張力などのコミュニケーション能力が「人気者」などのスクールカーストの地位と関連していることも報告されている (水野・加藤・川田, 2015; 鈴木, 2012)。

つまり、「スクールカースト」におけるグループ間の地位については、人気がある生徒というようなソシオメトリーに類似した指標によって把握する立場 (鈴木, 2012) と生徒の能力や属性から典型的に把握する立場 (堀, 2015; 森口, 2007) が存在する。しかし、これらの地位の把握については以下の問題点が考えられる。第1に、鈴木 (2012) では、集団の地位を測定するのに、その指標として、「クラスの人気者だ」という生徒個人の特性に関する指標を用いていたことである³。なぜなら、グループの地位を測定する際に「クラスの人気者だ」という指標では、生徒個人の学級内の地位を測定しているのか、グループの集団間の地位を測定しているのかが不明だからである。つまり、個人に関する評価だけでは集団「間」の関係性と集団「内」の関係性の影響が交絡することが考えられるということである。水野他 (2015) では、グループ間の地位を測定することで集団「間」の関係性は考慮に入れられていたが、グループ内の地位の影響は考慮に入れられていなかった。そのため、集団「内」の関係性の影響が交絡していた可能性が考えられる。

第2に、「スクールカースト」において、地位を典型的⁴に把握することについての問題である。例えば、スクールカーストの地位を決める要素には地域性が存在するという指摘 (堀, 2015) があり、地域によっては、

子どものコミュニケーション能力よりも、親の社会的な地位や「ヤンキー」のような非行へのコミットの程度が地位に影響することもある。また、グループ間の地位を典型的に捉えることには、学校適応を典型的・加算的に捉えるときに存在する問題 (岡田, 2015; 大久保, 2010) と同様の問題が存在すると考えられる。例えば、学校が異なれば学習への適応が学校適応に対して重要ではなくなる (大久保, 2005) 場合があるように、地位を決定する要素も、コミュニケーション能力などに限られず、学校や学級で異なると考えられる。つまり、「スクールカースト」が学級内での地位格差に基づく関係であるならば、集団間の地位は個々の教室内の生徒同士の相互作用で決定されるため、同じ学校であっても学級間で地位の決定要因で重視される要素に差異が存在すると考えられる。

以上のことを踏まえ、グループ間の地位と学校適応の関係を検討するためには、次の2点を考慮する必要があると考えられる。第1に、集団間の地位に関する指標と集団内の地位に関する指標を両方とも測定し、集団間の関係性から集団内の関係性による影響を取り除く必要がある。第2に、どのような環境であっても集団間の地位を反映する指標で測定する必要がある。そこで、本研究ではグループ間の地位とグループ内の地位についてそれぞれ、「生徒本人によって知覚された主観的なグループ間の相対的な地位」と「生徒本人によって知覚された主観的なグループ内の相対的な地位」と定義する。この定義にしたがい、グループ間の地位とグループ内の地位を測定し、それぞれの地位と学校適応の関係を検討する。

なお、グループ間の地位が学校適応に与える影響のメカニズムについては鈴木 (2012) が大学生へのインタビューから明らかにしている。例えば、高地位グループの生徒はクラスの中で言いたいことを自由に発言できるなどの権利を有しており、その権利を行使することで学校が楽しいと感じていた。また、それと同時に、高地位グループの生徒は、低地位グループの生徒に対して理不尽な愚痴を浴びせるなどの攻撃的な行動や、一方的に馬鹿にして笑うといった差別的な態度を取ることも示されている。その一方で、低地位のグ

² ここでの同調力とは「クラスのノリ (空気) に同調し、場合によっては空気を作っていく力」 (森口, 2007, p. 45) である。

³ 集団関係を測定する場合、ソシオメトリーのような他者評価に基づく客観的な指標 (e.g., Coie, Dodge, & Coppotelli, 1982) を用いることが望ましいとされる。しかし、研究に対する倫理規定の制約が厳密になった現在では難しいと考えられるため、主観的な報告に基づく指標を用いることが調査協力者や調査協力校への負担が少なく、研究倫理上も好ましいと思われる。

⁴ 欧米の中高生の友人関係では典型的な仲間集団が多数存在し、仲間集団の類型では集団の地位や自尊感情などの特性も異なることが示されている。例えば、人気のある仲間集団 (populars) は高地位集団に含まれ、見放された集団 (outcasts) を含む低地位集団よりも自尊感情が高く、社会不安が低い (Brown & Bank, 2008)。

ループの生徒は地位にそぐわない行動は高地位グループによって制限され、高地位グループの生徒からの卑下的な評価や理不尽なおこないによる被害を受けて居心地の悪さを感じていた。しかし、鈴木 (2012) の研究は大学生を対象とした回想的なインタビューによるものであり、中学生が実際にそのような差別的・支配的な価値観を有しつつ学校に適応しているかは不明である。また、水野他 (2015) も地位と学校適応を直接的に検討したに過ぎず、グループ間の地位が学校適応に与える影響のメカニズムについては検討されていない。そこで、本研究では高地位グループの差別的・支配的な態度に着目し、グループ間の地位が差別的・支配的な態度と学校適応に関連するかを検討する。

集団間の地位格差に対する理論的視点

学級内のグループに限らず、一般的な集団関係においても、自身より劣った集団に対する差別的な態度が引き起こされることが知られている (e.g., Duckitt & Sibley, 2007)。このような集団間の地位格差と葛藤を扱った研究に社会的支配理論 (Sidanius & Pratto, 1999) が存在する。社会的支配理論では、集団間の平等・階層関係に対する個人の価値観を社会的支配志向性 (Social Dominance Orientation; 以下「SDO」とする) と呼ぶ。社会的に地位が高い人間の方が高い SDO を持つ (e.g., Sidanius & Pratto, 1999) ことや、高い SDO を持つ人は、集団間の序列を増強し、内集団が外集団に対して支配を望むという強い欲求を持つとされる (Hewstone, Rubin, & Willis, 2002) ことが明らかとなっている。このように、SDO は特性的な側面を持つ一方で、実験的操作により一時的に地位が高くなった人間も SDO が高くなることも明らかにされている (e.g., Pratto, Sidanius, & Levin, 2006)。さらに、SDO の高さは正当化神話 (Legitimizing Myth) という集団間の不平等や格差を是正もしくは促進・正当化するイデオロギーを高めることも知られている (e.g., Sidanius & Pratto, 1999)。また、アメリカの公立校の9年生を対象にした調査では、生徒間の地位が高い生徒ほど SDO も高く、SDO が高いほど関係攻撃性も高い (Mayeux, 2014) ことも明らかになっていることから、学校内の地位についても、SDO の応用可能性が示唆されている。つまり、教室内のグループの地位格差についても、地位が高いグループに属すると生徒の SDO も高くなり、地位の低いグループの生徒に対して差別的な態度を持つことが考えられる。

これまで多くの研究では SDO 尺度は1因子構造として捉えられてきた。しかし、近年の研究で SDO 尺

度は、支配的な集団間の格差関係をより直接的に是認する態度の「集団支配志向性」(Group based dominance; SDO-D) と、集団間関係が平等であることに巧妙に反対する態度の「反平等主義志向性」(Oppression to equality; SDO-E) の2因子構造となり、それぞれ関連する態度も異なることが知られている (e.g., Ho et al., 2012; Jost & Thompson, 2010)。また、日本では杉浦・坂田・清水 (2014) が反平等主義志向性の得点の逆転処理を行わず「平等主義志向性」として用いている。

学校適応の指標

なお本研究では、学校適応に関する指標は大久保 (2005) の青年用適応感尺度を用いる。この尺度は、「個人が環境と適合しているときの感覚」という主観的な適応の状態を測定することができる。スクールカーストは学力とは強く関係しない (鈴木, 2012) という指摘や、地位格差が存在する学校という環境への適応を測定するという本研究の目的を踏まえると、対人関係や学業といった要素の集合としての適応感 (e.g., 小泉, 1995) ではなく、個人と環境の適合性の視点から適応感を測定する方が妥当だからである。また、スクールカーストと学校適応の関係について検討した水野他 (2015) で用いられた学校適応の指標は個人と環境の適合性の視点を欠いていた。したがって、本研究では、学校適応における居心地や充実感を検討するために、大久保 (2005) の「居心地の良さの感覚」と「課題・目標の存在」を用いることとした。

本研究の目的

以上の議論から、本研究では「スクールカースト」の問題に対して主観的に知覚されたグループ間の地位と SDO に着目し、グループ間の地位が学校適応に与える影響を検討する。具体的には、以下の2つの点を考慮する。第1に、「スクールカースト」における地位を測定するために、グループ間の地位を主観的な報告に基づいて測定する。その際に、グループ内の地位も測定し、変数として投入することでグループ間・内の地位による効果を分割しつつ、グループ間の地位が SDO と学校適応に与える影響を検討する。第2に、平等・格差に対する志向性である SDO に着目し、グループ間の地位が SDO を媒介として学校適応に影響を及ぼすことを示す。なお、SDO が特性的、あるいは状態的なものであるかについては両方の可能性が考えられる (e.g., 杉浦他, 2014)。つまり、「スクールカースト」と SDO の関係を考える際には、SDO がグループ間の地位を予測する場合と、グループ間の地位が SDO を予測する場合の両方の場合が考えられる。し

かし、本研究はグループ間の地位によって態度や学校適応感がどう変化するかを検討することを目的としている。そのため、本研究ではグループ間の地位という社会的な状況がSDOを予測するというを想定し、「スクールカースト」におけるグループ間の地位と学校適応の関係を媒介する要因としてSDOを検討する。そして、それらを通して、「スクールカースト」が中学生の学校適応に与える影響を検討することが本研究の最終的な目的である。

方 法

調査協力者

A市とB市の中学校1年生から3年生の1,179名であった。なお、内訳は以下である。1年生(男子209名, 女子202名, 性別無回答2名), 2年生(男子219名, 女子176名, 性別無回答2名), 3年生(男子184名, 女子178名, 性別無回答7名)であった。

質問紙の内容

以下に挙げる項目はすべて5件法(全くそう思わない(1点) - とてもそう思う(5点))で尋ねた。社会的支配志向性および、青年期用適応感尺度については原著者に使用・改変の承諾および内容の確認を得た⁵。

グループ間の地位・グループ内の地位 まず、クラスで一番関わっているグループを想起してもらった上で、「グループがある」と答えた生徒(85.59%)に回答してもらった。「グループがない」と回答した生徒はグループに関する設問を飛ばすよう教示した。そして、水野他(2015)を参考にし、自分のグループの学級内の地位(「私の仲良しグループはクラスで中心的な存在だと思う」)と回答した生徒のグループ内の地位(「私は仲良しグループの中で中心的な存在だと思う」)を尋ねた。

社会的支配志向性 杉浦他(2014)の改訂版・社会的支配志向性尺度(22項目)を参考に作成した。調査実施校の教員と相談の上、中学生でも理解しやすく倫理上問題ない文章に変更した。また、回答の負担も考慮し、教員との協議の結果、7件法から5件法に変更し、項目数も22項目から10項目に削減して尋ねた。

学校適応感 学校適応感を測定するために大久保(2005)の青年期用適応感尺度を使用し、その下位尺

度である「居心地の良さの感覚」(例「周囲に溶け込んでいる」)と「課題・目標の存在」(例「やるべき目標がある」)を用いた。回答への負担を考え、教員との協議の結果、それぞれ因子負荷量の高い順で5項目ずつを用い、表現に若干の修正を加え回答方法も変更した。

調査時期と倫理的配慮ならびに手続き

A市では2015年10月に実施され、B市では2015年11月に実施された。調査の実施にあたっては、所属機関の研究倫理委員会の倫理審査の承認を得たほか、協力校の管理職や教員と数回の協議の上で質問項目の選定および文章表現の確認・修正をおこない、倫理上問題のない項目であることを確認した上で実施された。また、それぞれの学級活動の時間を使ってクラス単位で一斉に実施された。回答を求める際には、回答したくない質問には回答しなくていいことと正しい回答は存在しないことを教示し、回収の際には生徒にその場で封筒に入れて封をしてもらうことで回答が他人に見られることのないように配慮した。

結 果

地位の指標に関する確認

まず、分析をおこなう前にグループ間、グループ内の地位の記述統計量を確認した⁶。グループ間の地位($n=998$)の平均値は2.692($SD=1.079$)、グループ内の地位($n=996$)の平均値は2.607($SD=0.928$)であり、最頻値はどちらも3であった。つまり、どちらも2-3点の間の値を取る生徒が多く、分散も極端な値でないことも確認された。また、鈴木(2012)ではスクールカースト地位の分布は上位が14.8%、中位が48.5%、下位が36.6%となっている。本研究でも、先行研究に類似して中位に相当する人数が多数を占める分布となった。詳細な回答分布はAppendix 1を参照されたい。

尺度構成

次に、SDOの項目について因子分析をおこなう前に各項目の平均値と標準偏差を求めた(Table 1)。その結果、杉浦他(2014)のSDOで平等主義志向性因子にあたる5項目中の3項目において天井効果がみられた。しかし、因子構造を推定するために、慣例的な分析の手続きを踏襲し、SDOの10項目について最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析($n=1138$)をおこなった(Table 1)。その結果、杉浦他(2014)と同様に集団支配志向性($\alpha=.666, M=3.437, SD=0.715$)と

⁵ 調査以前に、青年用適応感尺度は2015年8月、社会的支配志向性尺度は2015年2月に口頭で使用の承諾を得ていたが、尺度の項目を改変したため、審査の過程で文章による承諾を得る必要があると指摘を受けた。そこで、調査後に改めてEメールを通じて文章での承諾・改変の確認を両尺度ともに2017年2月に得た。

⁶ 学級の人数が2名の学級が2学級存在したので、分析から除外した。階級幅は1であった。

Table 1 社会的支配志向性尺度の因子分析の結果（最尤法，プロマックス回転）

項目	F1	F2	h^2	M	SD
F1：平等主義志向性 ($\alpha = .839$)					
どんな人たちの間でも、平等であることはいいことだと思う	.803	-.007	.646	4.063	0.978
すべての立場の人達が平等に関わり合うべきだと思う	.771	-.067	.605	3.897	1.049
ある人たちだけを特別あつかいせず、どんな人たちも平等に関わることはいいことだと思う	.701	-.076	.504	4.259	0.948
平等な世の中になるように努力することはいいことだと思う	.700	.124	.494	4.180	0.915
どんな立場の人たちとも平等に関わる方が、たいてい世の中はうまくいくと思う	.616	-.075	.392	3.476	1.128
F2：集団支配志向性 ($\alpha = .666$)					
特定の実力のある人たちが仕切るのが、世の中はうまくいくと思う	-.085	.657	.446	3.007	1.080
実力のある人たちが上に立って、他の人たちを引っ張っていく方がいいと思う	-.033	.616	.383	3.418	1.079
実力のある人たちが、他の人たちと比べて、結果的に得することが多くなるのは当然だと思う	-.073	.562	.327	3.474	1.124
ある人たちが中心的な立ち位置になるのには、それだけの納得できる理由があると思う	.163	.517	.282	3.559	1.103
他の人たちよりも、成功のチャンスに恵まれている人たちがいると思う	.084	.344	.122	3.727	1.075
	因子間相関		-.067		

注) 天井効果がみられた項目に網掛けを施した。

平等主義志向性 ($\alpha = .839$, $M = 3.975$, $SD = 0.786$) の 2 因子解 (因子間相関は $r = -0.67$) が得られた。集団支配志向性の α 係数が低い値を示したが、許容範囲内の値であると判断し、下位尺度ごとに平均を求め、得点化した。

次に、集団支配志向性では女性よりも男性の得点が高く、平等主義志向性では男性よりも女性の得点が高いという性差がみられる (杉浦他, 2014) ことから、性別による Welch の t 検定をおこなった。その結果、集団支配志向性では男子 ($M = 3.523$, $SD = 0.739$) の方が女子 ($M = 3.343$, $SD = 0.675$) よりも得点が高く ($t(1145.644) = 4.311$, $p < .001$, $d = 0.253$)、平等主義志向性では女子 ($M = 4.056$, $SD = 0.702$) の方が男子 ($M = 3.903$, $SD = 0.850$) よりも得点が高かった ($t(1130.780) = 3.338$, $p < .001$, $d = 0.196$)。つまり、SDO において先行研究 (杉浦他, 2014) と同様のパターン⁷が確認された。

学校適応感についても、下位尺度ごとに平均を求め、得点化した。居心地の良さの感覚 ($\alpha = .907$, $M = 3.586$, $SD = 0.816$)、課題・目標の存在 ($\alpha = .867$, $M = 3.660$, $SD = 0.858$) とともに十分な内的一貫性が示された。

地位による SDO、学校適応感の平均値の比較

本研究で検討するモデルの分析をおこなう前に、地位によって SDO と学校適応感の得点がどの程度異なるかを確認するため、以下の手順で分散分析をおこ

なった。まず、5 件法で測定したグループ間の地位について、1 と 2 に回答した生徒を下位、3 に回答した生徒を中位、4 と 5 に回答した生徒を上位となるように 3 分割した。グループ内の地位についても同様の手順で 3 分割した。そして、3 分割したグループ間の地位とグループ内の地位を独立変数、SDO と学校適応感をそれぞれ従属変数とした 2 要因分散分析をおこなった (Table 2)。

まず、集団支配志向性では、グループ間の地位の主効果が有意 ($F(2,974) = 16.604$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .033$) であり、グループ内の地位の主効果 ($F(2,974) = 0.484$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .001$) と交互作用の効果 ($F(4,974) = 2.140$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .009$) は有意ではなかった。グループ間の地位について多重比較⁸の結果、上位は下位よりも有意に得点が高く、また、上位は中位よりも有意に得点が高かった。

平等主義志向性ではグループ間の地位の主効果 ($F(2,971) = 0.048$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .000$)、グループ内の地位の主効果 ($F(2,971) = 2.891$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .006$)、交互作用の効果 ($F(4,971) = 0.447$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .002$) の全ては有意ではなかった。

居心地の良さではグループ間の地位の主効果 ($F(2,970) = 19.033$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .038$)、とグループ内の地位の主効果 ($F(2,970) = 12.103$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .024$) は有意であった。しかし、交互作用の効果 ($F(4,970) = 1.128$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .005$) は有意ではなかった。そこで、ま

⁷ 杉浦他 (2014) の平等主義志向性に相当する海外の SDO 研究 (e.g., Ho et al., 2012) の下位尺度の得点は逆転処理がされ、得点の性差は女性 < 男性になる。

⁸ 多重比較は全て Bonferroni 法による。

Table 2 3分類したグループ間地位とグループ内地位による変数の平均値の比較

グループ間	下位			中位			上位			F値/効果量 η_p^2			
	下位	中位	上位	下位	中位	上位	下位	中位	上位	グループ間の地位	グループ内の地位	交互作用	
集団支配志向性	3.328 (0.762)	3.371 (0.659)	3.157 (0.855)	3.448 (0.695)	3.399 (0.622)	3.488 (0.698)	3.557 (0.631)	3.665 (0.838)	3.937 (0.838)	16.604***/.033	0.484 —	/.001 —	2.140/.009 —
平等主義志向性	3.919 (0.809)	4.004 (0.744)	4.248 (0.817)	4.005 (0.796)	4.034 (0.740)	4.058 (0.692)	3.921 (0.582)	4.002 (0.639)	4.236 (0.838)	0.048 —	/.000 —	2.891 —	/.006 —
居心地の良さ	3.305 (0.854)	3.501 (0.728)	3.500 (1.002)	3.527 (0.746)	3.724 (0.728)	3.960 (0.554)	3.638 (0.693)	3.942 (0.752)	4.333 (0.690)	19.033***/.038	12.103***/.024	1.128/.005	1.128/.005 —
課題・目標の存在	3.587 (0.886)	3.599 (0.788)	3.743 (1.002)	3.519 (0.834)	3.708 (0.870)	4.008 (0.727)	3.532 (0.826)	3.850 (0.750)	4.211 (0.850)	2.719 —	/.006 —	8.776***/.018	1.128/.006 —

注) カッコ内は標準偏差であり、F値の下段は多重比較である。

*** $p < .001$

ずグループ間の地位について多重比較の結果、全ての群間で有意な差がみられた。中位は下位よりも有意に得点が高く、上位は下位よりも有意に得点が高く、上位は中位よりも有意に得点が高かった。次に、グループ内の地位について中位は下位よりも有意に得点が高く、上位は下位よりも有意に得点が高かった。

最後に、課題・目標の存在ではグループ内の地位の主効果 ($F(2,972)=8.776$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .018$) が有意であった。しかし、グループ間の地位の主効果 ($F(2,971)=2.719$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .006$) と交互作用の効果 ($F(4,971)=1.128$, $n.s.$, $\eta_p^2 = .006$) は有意ではなかった。そこで、グループ内の地位について多重比較の結果、全ての群間に有意な差がみられた。中位は下位よりも有意に得点が高く、上位は下位よりも有意に得点が高く、上位は中位よりも有意に得点が高かった。

以上のことからグループ間の地位と集団支配志向性、学校適応感の間に関連が示された。同時に、グループ内の地位に関しても学校適応感との間に関連がみられた。

構造方程式モデリングによる直接・間接効果の推定

性別、グループ間の地位、グループ内の地位の全てに回答した生徒 (987名) のデータを用いて構造方程式モデリングによる分析をおこなった。なお、分析に用いた変数の相関係数を Appendix 2 に示す。分析には Amos 22 を用いて、多重代入法による欠損値推定をおこなった。モデルには統制変数として性別、学年を投入した⁹。居心地の良さと課題・目標の存在の誤差間にもみ共分散を仮定した初期のモデルは適合度が低かった ($\chi^2(7)=238.242$, $n.s.$, CFI = .787, RMSEA = .183, AIC

= 312.242)。そのため、修正指数を参考にグループ間の地位とグループ内の地位と性別の間に全て共分散を仮定したモデルを設定したところ、適合度が改善された ($\chi^2(4)=10.758$, $p < .05$, CFI = .994, RMSEA = .041, AIC = 90.758)。この最終的なモデルを Figure 1 に示す¹⁰。

地位による効果は以下のとおりである。グループ間の地位は集団支配志向性 ($\beta = .159$)、居心地の良さ ($\beta = .225$) に有意な正の効果を持った ($p_s < .001$)。しかし、平等主義志向性 ($\beta = .037$, $n.s.$) と課題・目標の存在 ($\beta = .061$, $n.s.$) には有意な効果を持たなかった。グループ内の地位は平等主義志向性 ($\beta = .084$, $p < .05$)、居心地の良さ ($\beta = .151$)、課題・目標の存在 ($\beta = .123$) に有意な正の効果を持った ($p_s < .001$)。しかし、集団支配志向性 ($\beta = .044$, $n.s.$) には有意な効果を持たなかった。

SDO による効果は以下のとおりである。集団支配志向性は居心地の良さ ($\beta = .131$) と課題・目標の存在 ($\beta = .176$) に有意な正の効果を持った ($p_s < .001$)。平等主義志向性は居心地の良さ ($\beta = .218$) と課題・目標の存在 ($\beta = .325$) に正の効果を持った ($p_s < .001$)。

つまり、グループ間の地位が高いことは、支配的な価値観と学校に対する居心地の良さを高めることが明らかとなった。また、グループ内の地位が高いことは平等的な価値観と学校に対する居心地の良さや課題・目標の存在の両方を高めることがわかった。

次に、有意な効果を持ったパスの間接効果を推定するために、パスの積の 95%信頼区間を Bootstrap 法で求めた (バイアス修正法, リサンプリング数 2,000 回)。その結果、グループ間の地位は集団支配志向性を媒介として居心地の良さ ($\beta = .021$, 95% CI [.051, .014]) と課題・目標の存在 ($\beta = .028$, 95% CI [.040, .009]) に有意な正の間

⁹ 性別は男子 = 0, 女子 = 1 でダミーコーディングした。学年は 1 年生 = 1, 2 年生 = 2, 3 年生 = 3 でコーディングして連続変量の扱いで投入した。なお、ここでのグループ間の地位とグループ内の地位の変数は 5 件法の変数を使用した。

¹⁰ なお、誤差と統制変数は省略した。

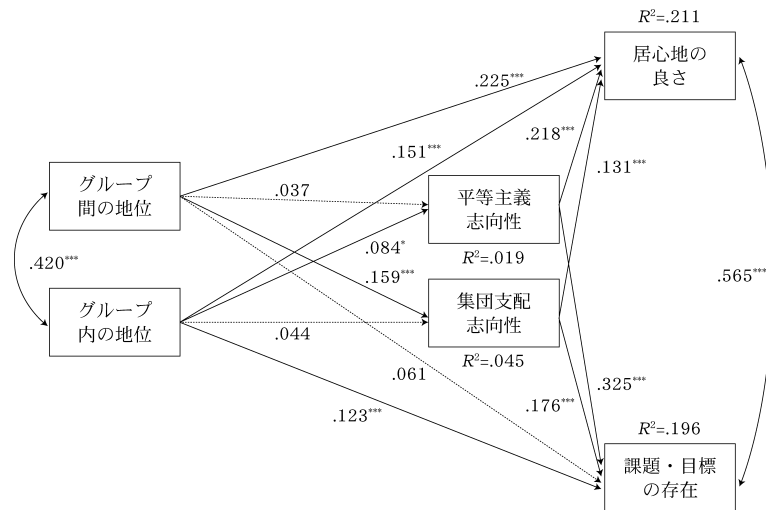


Figure 1 グループ間の地位，グループ内の地位，SDO，学校適応感の関係
 $***p < .001$ $*p < .05$

接効果を持った。また，グループ内の地位は平等主義志向性を媒介として居心地の良さ ($\beta = .018$, 95%CI [.039, .003]) と課題・目標の存在 ($\beta = .027$, 95%CI [.055, .004]) に有意な正の間接効果を持った。

さらに，学校適応感の両下位尺度への効果の弁別性を確認した。SDOの両下位尺度からの効果は課題・目標の存在に対する効果の方が有意に大きかった ($Z_s > 2.036$, $p_s < .05$) が，グループ内の地位からの効果では有意な違いはみられなかった ($Z = -.604$, *n.s.*)。

つまり，グループ内の地位ではなく，グループ間の地位が高いことが，支配的な価値観を高めることを通して，学校適応感を高めることが明らかとなった。また，グループ間の地位ではなく，グループ内の地位が高いことは平等的な価値観を通して学校適応感を高めることが明らかとなった。

考 察

結果のまとめ

本研究の目的は「スクールカースト」の問題に対して主観的に知覚されたグループ間の地位とSDOに着目し，グループ間の地位と学校適応の関係を検討することであった。まず，SDO尺度に関しては，平等主義志向性の項目で天井効果がみられたものの，先行研究と同じく2因子が再現され，先行研究と同様の性差もみられた。そして，グループ間の地位からは集団支配志向性を媒介として学校適応感に影響を及ぼすこと

が明らかとなった。また，グループ内の地位は平等主義志向性を媒介して学校適応感に影響を及ぼすこともわかった。その一方で，グループ間の地位は平等主義志向性に，グループ内の地位は集団支配志向性に対して有意な影響を与えないこともわかった。

「スクールカースト」と学校適応の関係

「スクールカースト」と学校適応の関係について，本研究の結果から以下の3つが明らかになった。

第1に，グループ内の自分の地位ではなく，自分の所属するグループ自体の地位が高いことは集団支配志向性を通して学校での居心地や目標に対する適応感を高めることが明らかとなった。このことは，高地位グループの生徒ほど集団間の地位格差の是認を志向し，階層関係への志向や正当化が，階層関係の存在する学校環境への適合感を引き上げたことを示す。この結果は，鈴木 (2012) の「上位グループが自分たちよりも下のグループを見下し，学校への適応感が高い」というインタビュー内容と整合的であり，「スクールカースト」と学校適応の関係性を支持するものであった。

第2に，グループ内の自分の地位が高いほど平等主義志向性を通して学校適応感を高めることが明らかとなった。つまり，グループで中心的な生徒ほど平等を志向する態度も高く，平等を志向する態度が高いほど学校への適応感も高くなった。このことからどのようなことが考えられるのだろうか。まず，学校では，平等性などの向社会的な規範が実践などで積極的に取り

入れられる傾向にある(渡辺, 2015)。そして、グループで中心的な生徒は交友関係がよく、活躍する機会が多いと予想される。つまり、グループで中心的な生徒はそうでない生徒よりも相対的に不平等・不公平な経験を受けていないと考えられる。そのため、グループ内で高地位の生徒は平等が好まれる学校の雰囲気と自身の状況に齟齬が少ないため、グループ内地位と平等主義志向性に正の関係がみられたのではないかと考えられる。また、平等を志向する価値観を持つほど、平等が好まれる学校の中での適応感が向上したのだと考えられる。

さらに、SDOと学校適応感の関連の中でも、課題・目標の存在がより関連していた。SDOは階層を縮小または拡大・正当化するイデオロギーである正当化神話(e.g., Sidanius & Pratto, 1999)を促進するため、正当化神話に基づいて課題・目標がより明確化された学校生活での行動によって、充実感をより覚えたのではないかと考えられる。

第3に、グループ間やグループ内の地位が直接的に学校適応感と関係していることも明らかとなった。このことは、グループ間・内を問わず、地位が高い生徒は教室中や自分のグループ内で中心的な役割を担うことが予想されるため、学校適応感が高くなったのではないかと考えられる。さらに学校適応感に対するグループ間の地位による効果は居心地の良さのみが有意だった。このことは、所属グループの地位が高いことは直接的に自分の地位が高い環境での居場所感を生み出すため、居心地の良さに関連したと考えられる。

グループ間の地位とグループ内の地位の関係

また、グループ間の地位とグループ内の地位の関係について、正の相関がみられた($r=.420$)。このことは、グループ間の地位とグループ内の地位は完全に独立した関係にはないが、ある程度の共変関係にあると捉えることができる。この点に関して、「自己知覚の脱個人化」といった自己のイメージを自分の所属カテゴリーを基準へとステレオタイプ化する自己カテゴリー化(Turner, 1987 蘭・内藤・磯崎・遠藤訳 1995)による解釈が可能だと考えられる。つまり、高地位グループの生徒はグループの中での自己のイメージ(グループ内の地位)に対しても、集団の特性(高地位)のバイアスがはたらき、自分自身をグループ内でより高地位な存在として評価したということである。

本研究で得られた知見の意義

本研究の意義としては以下の4つである。まず、スクールカースト言説における、生徒のグループ間の地

位と学校適応の関係に対して心理メカニズムに着目し、量的側面から実証できたことである。これまでスクールカーストの問題は、例えば、水野他(2015)を除き、教育社会学者による社会調査やインタビューなどの質的研究や、教師や教育評論家等による経験的な論考で検討されてきた。そのため、なぜグループ間の地位が学校適応に結びつくのかということに関してのメカニズムの説明を欠いてきた。したがって、本研究のように、社会的支配理論を用いて計量的に、「スクールカースト」が中学生の学校適応に及ぼす影響の心理的メカニズムに着目する試みは意義があると言えるだろう。

第2に、「スクールカースト」における地位の捉え方を示したことである。本研究では、「スクールカースト」における地位の指標として、個人に関する指標(水野他, 2015; 鈴木, 2012)やコミュニケーション能力(堀, 2015; 森口, 2007)を用いなかった。その代わりに、グループ間の地位とグループ内の地位という、「友だちグループ」に着目した指標を用いた。その結果、グループ間の地位のみが集団支配志向性を通して学校適応感に有意な間接効果を持ったことが明らかとなった。つまり、これまでの研究(e.g., 鈴木, 2012)では人気者という個人に基づく指標が用いられてきたが、本研究の結果からすると、グループ間の地位という集団に基づく指標を用いることがスクールカーストの問題を明らかにする上で重要であると考えられる。

そして第3に、学校適応の研究に対して、適応の要因に関する負の側面(水野, 2016)を示唆したことである。これまで、学校適応は基本的に良いものとして捉えられ、学校適応を向上させるポジティブな変数や、逆に低下させるネガティブな変数との結びつきで学校適応が扱われてきた(e.g., 大対・大竹・松見, 2007)。確かに、本研究においてもグループ内の地位が高いことが平等的を志向する価値観を通して学校適応感に結びつくことを明らかにした。その一方で、グループ間の地位が高いことは支配的な側面を有する価値観への支持を通して学校適応に結びつくことも明らかにした。つまり、この結果は、一部の生徒にとっては、自分たちよりも下のグループと認識される生徒に対する支配や抑圧の上に学校適応が成り立っている可能性があることを示唆していると思われる。言い換えると、ある集団の成員の適応には他集団の犠牲の上に成り立っている側面も存在すると推察される。しかし、このような適応の要因に関する負の側面について、これまでの研究ではほとんど扱われてこなかった。したがって、こ

のように学校適応の要因に関する負の側面を明らかにした本研究の結果は、学校適応の要因を基本的に肯定的な側面から捉えてきた従来の研究に対して、新たな研究の視点を提供するものであると考えられる。

第4に、平等主義志向性は集団支配志向性よりも学校適応感と強い正の関連を示した。このことから、どのようにして平等に対する価値観を醸成していくかという教育や学校の環境づくりも、中学生の学校適応にとって重要であると考えられる。

本研究の限界点と展望

第1に、SDO尺度について、平等主義志向性の複数の項目での天井効果がみられたこと、また集団支配志向性の低い信頼性、妥当性の検討が不十分なことが課題であった。平等性という極めて価値的な問題は学校においては道徳や向社会的な規範が好まれて実践などで積極的に取り入れられる傾向にある(渡辺, 2015)ため、社会的望ましさを回避しにくいと考えられる。そのため、今後の研究で、社会的望ましさを回答の負担を軽減できる工夫が望まれる。また、集団支配志向性の α 係数が低かったことから、SDOの項目を全体的に洗練させる必要がある。尺度の妥当性も性差のみの検討となったので、今後の研究では共感性や、権威に対する態度との関連を検討する必要がある。

第2に、本研究では「スクールカースト」でのグループ間の地位について連続性を仮定し質的な違いを考慮しなかった。また「スクールカースト」の発生機序も検討していない。したがって、今後の研究では多母集団同時分析のようにグループの地位ごとにサンプルを分割し、グループ内の地位を考慮した分析をすることや、「スクールカースト」の発生機序を予測する要因についても縦断的な検討が必要である。同様に、グループの地位がSDOを媒介し、学校適応に影響を与えるという因果推論も、本研究の知見だけでは十分に示されない。例えば、元々のSDOが高いためグループ地位の認知が高くなり、学校へ適応している場合や、学校に適応しているからこそSDOやグループの地位に対する認知が向上する可能性も考えられる。このことも、縦断的な研究によって明らかにされるべきであろう。このように、本研究で「スクールカースト」について明らかになったことは僅かなことであり、実際に高地位グループの生徒の学校適応が下位グループの生徒の犠牲の上に成り立つのかなど、「スクールカースト」の内実については更なる検討が必要である。

引用文献

- Brown, B. B., & Bank, H. V. (2008). Smoke in the looking glass: Effects of discordance between self- and peer-rated crowd affiliation on adolescent anxiety, depression and self-feelings. *Journal of Youth Adolescence*, 37, 1163-1177. doi:10.1007/s10964-007-9198-y
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Coppotelli, H. (1982). Dimensions and types of social status: A cross-age perspective. *Developmental Psychology*, 4, 557-570. doi:10.1037/0012-1649.18.4.557
- Duckitt, J., & Sibley, C. G. (2007). Right wing authoritarianism, social dominance orientation and the dimensions of generalized prejudice. *European Journal of Personality*, 21, 113-130. doi:10.1002/per.614
- 古市裕一・玉木弘之 (1994). 学校生活の楽しさとその規定要因 岡山大学教育学部研究集録, 96, 105-113.
- Hazan, C., & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships*. Vol. 5 (pp. 151-178). London: Jessica Kingsley.
- Hewstone, M., Rubin, M., & Willis, H. (2002). Intergroup bias. *Annual Review of Psychology*, 53, 575-604. doi:10.1146/annurev.psych.53.100901.135109
- Ho, A. K., Sidanius, J., Pratto, F., Levin, S., Thomsen, L., Kteily, N., & Sheehy-Skeffington, J. (2012). Social dominance orientation revisiting the structure and function of a variable predicting social and political attitudes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38, 583-606. doi:10.1177/0146167211432765
- 堀 裕嗣 (2015). スクールカーストの正体—キレイゴト抜きでのいじめ対応 小学館
- 石田靖彦 (2002). 面接法を用いた集団構造の把握—ソシオメトリック・データとの比較による信頼性・妥当性の検討 愛知教育大学研究報告, 51, 93-100.
- 石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連—仲間集団の形成・所属動機という視点から 愛知教育大学研究

- 報告, 58, 107-113.
- Jost, J. T., & Thompson, E. P. (2000). Group-based dominance and opposition to equality as independent predictors of self-esteem, ethnocentrism, and social policy attitudes among African Americans and European Americans. *Journal of Experimental Social Psychology, 36*, 209-232. doi:10.1006/jesp.1999.1403
- 小泉令三 (1995). 小学校中学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, 44, 295-303.
- 楠見幸子 (1986). 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学校モラルに関する研究 教育心理学研究, 34, 104-110. doi:10.5926/jjep1953.34.2_104
- Mayeux, M. (2014). Understanding popularity and relational aggression in adolescence: The role of social dominance orientation. *Social Development, 23*, 502-517. doi:10.1111/sode.12054
- 水野君平 (2016). 学校適応感とその予測要因に関する検討 (1) —「学校適応の負の側面」としてのスクールカースト 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 126, 101-110. doi:10.14943/b.edu.126.101
- 水野君平・加藤弘通・川田 学 (2015). 中学生における「スクールカースト」とコミュニケーション・スキル及び学校適応感の関係—教室内における個人の地位と集団の地位という視点から 子ども発達臨床研究, 7, 13-22.
- 森口 朗 (2007). いじめの構造 新潮社
- 岡田有司 (2015). 中学生の学校適応—適応の支えの理解 ナカニシヤ出版
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319. doi:10.5926/jjep1953.53.3_307
- 大久保智生 (2010). 青年の学校適応感に関する研究—関係論的アプローチによる検討 ナカニシヤ出版
- 大対香奈子・大竹恵子・松見淳子 (2007). 学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み 教育心理学研究, 55, 135-151. doi:10.5926/jjep1953.55.1_135
- Pratto, F., Sidanius, J., & Levin, S. (2006). Social dominance theory and the dynamics of intergroup relations: Taking stock and looking forward. *European Review of Social Psychology, 17*, 271-320. doi:10.1080/10463280601055772
- Sidanius, J., & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*. New York: Cambridge University Press.
- 杉浦仁美・坂田桐子・清水裕士 (2014). 集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響 社会心理学研究, 30, 75-85. doi:10.14966/jssp.30.2_75
- 鈴木 翔 (2012). 教室内(スクール)カースト 光文社
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, UK: Blackwell. (ターナー, J. C. 蘭 千壽・内藤哲雄・磯崎三喜年・遠藤由美 (訳) (1995). 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論 誠信書房)
- 渡辺弥生 (2015). 健全な学校風土をめざすユニバーサルな学校予防教育—免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソーシャル・エモーショナル・ラーニング 教育心理学年報, 54, 126-141. doi:10.5926/arepj.54.126
- 山中一英 (2009). 「学級集団と友人関係」をめぐる諸問題への社会心理学的接近 兵庫教育大学研究紀要, 34, 23-34.

付 記

本論文は、第1著者が北海道大学大学院教育学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものです。研究にあたり、指導を賜りました加藤弘通先生(北海道大学)に感謝申し上げます。また、ご助言を賜りました北海道大学の 大谷和大先生, 上山浩次郎先生, 川田 学先生, 審査過程で重要なご指摘を寄せていただきました査読者の先生方に感謝申し上げます。最後に、本研究の実施に協力くださいました中学校の先生・生徒の皆さまに心より御礼を申し上げます。

(2016年7月6日受稿, 2017年8月16日受理)

Appendix 1 グループ間とグループ内の地位のクロス集計表（行列全体に対する％）

回答	グループ内の地位					計	
	1	2	3	4	5		
グループ間の地位	1	7.90%	3.20%	4.60%	0.70%	0.30%	16.70%
	2	2.30%	9.20%	9.30%	1.20%	0.10%	22.10%
	3	4.10%	6.90%	28.40%	2.00%	0.50%	41.90%
	4	0.60%	2.30%	7.20%	2.50%	0.40%	13.00%
	5	0.20%	0.70%	2.50%	1.40%	1.50%	6.30%
計	15.10%	22.30%	52.00%	7.80%	2.80%	100.00%	

注) 1：全くそう思わない 2：そう思わない 3：どちらでもない 4：そう思う 5：とてもそう思う

Appendix 2 構造方程式モデリングで用いた変数の相関関係

	1	2	3	4	5
1 グループ間の地位	—				
2 グループ内の地位	.420***	—			
3 平等主義指向性	.056	.097**	—		
4 集団支配志向性	.189***	.106***	-.037	—	
5 居心地の良さ	.329***	.284***	.239***	.181***	—
6 課題・目標の存在	.165***	.188***	.337***	.198***	.612***

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

Relationships Between School Caste and School Adjustment Among Junior High School Students

KUMPEI MIZUNO (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, HOKKAIDO UNIVERSITY) AND
MASAYOSHI OTA (FACULTY OF EDUCATION, TOKOHA UNIVERSITY)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2017, 65, 501–511

The goal of the present study was to investigate relationships between “school caste” and school adjustment, focusing on social dominance orientation (SDO). “School caste” was defined as “inter-peer group hierarchy”. Participants in the study were Japanese junior high school students ($N=1,179$). Inter- and intra-peer group status was measured from students’ subjective answers to questions about inter- and intra-peer group status. Also, social dominance orientation and subjective school adjustment were measured from students’ self-reports. Whether social dominance orientation mediated effects of inter-peer group status on school adjustment was examined. Despite controlling for effects of intra-group status, group-based dominance (i.e., social dominance orientation-dominance, or SDO-D, a sub-dimension of social dominance orientation) positively mediated effects of inter-peer group status on subjective school adjustment. In other words, students in the higher status peer groups tended to have higher group-based dominance, and, in turn, higher group-based dominance caused better subjective school adjustment. Thus, the results of the present study revealed that, among junior high school students, the relationship between school caste and school adjustment appears to be mediated by social dominance orientation. The discussion deals with the possibility that those students who were affiliated with higher status peer groups had better school adjustment because of their preference for dominating other groups.

Key Words: peer relations, peer status, school adjustment, social dominance orientation, school caste